

津山城は、改めて言うまでもなく合戦に備えた防御のための施設でしたが、その日常的な役割は、津山における藩主の居所であると同時に、津山藩の役所でもありました。津山藩のこうした施設は、城郭ではありませんが江戸や京、大坂にもありました。そして、その中でも、江戸藩邸は規模も大きく、数多くの家臣も住んでいました。

津山藩の江戸藩邸は、実際には何か所もあり、それぞれの役割も異なっていたのですが、通常、江戸藩邸という場合は、江戸城鍛冶橋門内にあった上屋敷を指しています。ここが藩主とその家族の居所であり、同時に、江戸における様々な政治的・経済的な活動の中心でした。

この鍛冶橋藩邸の建物は、火災などもあって、幾度も建て直されているのですが、文政2年（1819）に新たに追加して建てられた御殿は、少し性格が違っていました。

このころの鍛冶橋藩邸を描いた絵図では、この



御普請絵図（津山郷土博物館蔵）

津山城百聞録

～江戸藩邸の若殿様御殿～

新築された御殿を「若殿様御奥表向」と記しています。これは、若殿様専用の建物であり、さらに奥向きの部分と表向きの部分を備えた、形式上本格的な御殿であることを示しています。敷地の限られていた上屋敷内部では、こうした本格的な若殿様御殿を建設することは、異例のことでした。また、この若殿様御殿の敷地は、建設の直前に幕府から鍛冶橋藩邸の隣接地1、800坪余りを拝領したもので、表面的な理由は藩邸の敷地が手狭なためとされていますが、明らかに若殿様御殿建設の用地として与えられたものでした。

実は、この若殿様というのが第11代将軍家斉の子で、津山松平家に婿養子に入った銀之助だったのです。この銀之助は、元服の後は齊民と名乗り、また隠居後は確堂と号して活躍した人でした。

津山藩主斉孝は、男子がいらないことを理由として、將軍家に養子の願いを提出していました。それに対して、文化13年（1816）4月25日に内示があり、文化14年（1817）9月18日には、正式に銀之助の婿養子が決定しました。銀之助4歳のときでした。

そして、文化14年の12月23日、銀之助は、江戸城から津山藩鍛冶橋藩邸に入りました。それから1年余り後の、文政2年（1819）正月6日には、若殿様御殿の棟上げが執り行われ、28日、いよいよ銀之助が若殿様御殿に移ったのです。

ちなみに、このときの祝いの席では、列席する家臣たちは赤い色の着物を禁じられ、祝いの膳には焼き鳥・焼き魚を添えてはいけないことになっていました。現代にも通じる、新築祝いのときの禁忌がうかがわれます。

※現在の東京、京都、大阪

7月中のひとの動き

人口	111,437人(前月比+28)
男	53,187人(同+14)
女	58,250人(同+14)
世帯	42,817世帯(同+37)
転入	254人
転出	227人
出生	81人
死亡	80人

(8月1日現在)



広報つやまは、環境保護のため古紙配合率100%再生紙、大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクルにご協力ください

つぶやき

編集室

秋風にたなびく雲のたえ間よりもれいづる月の影のさやけさし左京大夫頼輔。月見には短歌が似合うと思います。酒よりも、団子よりも。月見ればちがに物こそ悲しけれ我が身ひとつの秋にはあらねど大江千里。(鉄)

50歳過ぎて仲間とバンドを楽しむMOZ'には感銘を受けました。豊かさが再考されているいま、子育て後の生き方はその鍵を握っていると思います。そんな彼らにあこがれつつ、9月25日私も彼らとステージに出ます。(X)

これは見逃せませんね。同時開催の「音の城まつり」も毎年楽しみ。グリーンヒルズでさわやかな風を受けて音楽を楽しむ。(X)さんとは別の意味で至福のときを過ごしたいです。取材は(鉄)さんということ...(e)

つやま 広報

9月



編集・発行

津山市企画部行政広報室（市役所3階）
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp
☆広報つやまはホームページで閲覧できます
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>

発行日 毎月10日

印刷 株式会社 津山朝日新聞社印刷部